報告書

第6回
子育て支援センター全国セミナー
2015 in 東京

テーマ

「広げよう、深めよう、伝えよう、
次世代までつながることを始めよう！」
―“妊娠・出産から子育てまで 切れ目ない子育て支援”の創造―

【参加状況】

〇申し込み人数：３７９名（男性６２名、女性３１７名）

〇参加地域：関東地区　１６０名
　　関東以外　２１９名

主催：日本子ども子育て支援センター連絡協議会
後援：厚労省　東京都　江東区　（福）全国保育協会
　　（福）日本保育協会　（公社）全国私立保育園連盟

日程：平成２７年１０月１４日（水）～１５日（木）２日間
会場：東京TOC有明（セミナー会場）
　　有明ワシントンホテル（交流会会場）

2日間の日程

第1日　10月14日（水）

11：00　**受付**　<20F WEST ロビー>

13：00　**開会**　<20F WEST GOLD 20ホール>

13：20　**基調提案**
「さあ始めよう！
私たちにできることから」
新澤誠治氏
（日本子ども子育てネット会長）

13：40　**行政説明**
「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」
厚生労働省雇用均等・
児童家庭局 総務課 少子化対策企画室

14：20　**基調講演**
「心育ての子育て」
渡辺久子氏
（慶應義塾大学医学部
小児科精神保健班顧問）

16：00　**パネルディスカッション**
「つなぐ、伝える、切れ目ない
子育て支援に向けて」

17：40　**インターセッション**
① 「フィンランドの育児事情と
保育施設の紹介」
<4F WEST ホール2>
② 「子育てを楽しみ、子どもの
かわいさを知る人が増える
社会になるために」
<20F WEST GOLD 20ホール>

18：40　終了

19：00　**全国支援者大交流会**
<有明ワシントンホテル>

第2日　10月15日（木）

8：00　**早朝セミナー**
① 「子育て支援の専門職に
必要とされる子どもの体の知識」
<4F WEST ホール1>
② 「小さな離島でみんなが工夫を
楽しむ子育て支援作り」
<4F WEST ホール3、4>
③ 「体験を通して成長する子どもと
大人の関わり」
―身近な自然の中での子育て支援―
<4F WEST ホール2>

9：00　**分科会①**
第1分科会　<20F WEST GOLD 20ホール>
「日本型子育て支援の創造」
―子育て支援センターは地域の中継地点―
第2分科会　<4F WEST ホール3、4>
「メディア漬けで壊れる子どもたち」
第3分科会　<4F WEST ホール2>
「親たちは子どもにどこまで
かかわることができるのか？」
第4分科会　<4F WEST ホール1>
事例研究　「はじめの一歩」

10：40　**分科会②**
第1分科会　<20F WEST GOLD 20ホール>
「ネウボラ：日本の子育て支援への意義」
第2分科会　<4F WEST ホール3、4>
「子どもへ 親へ どう向き合えば
いいのか」―ワークショップ・実践編―
第3分科会　<4F WEST ホール2>
「つながり・ぬくもり・やくわり」
―子育て文化の継承―
第4分科会　<4F WEST ホール1>
実践担当者交流　「ステップアップ」

12：10　昼食

12：15　**ランチョンセミナー**
① 「通信クリニック： 効果的な広報・
メール・便りの作り方」
<20F WEST GOLD 20ホール>
② 「時代の潮流、ITが変える新時代の
子育て支援環境を考える」
<4F WEST ホール2>
③ 「市内連絡会による支援職者
精神衛生の互助管理」
―ここがあるよ、ここにいるよ―
<4F WEST ホール1>

13：30　**記念講演**　<20F WEST GOLD 20ホール>
「フィンランド流しあわせな子育て」
～子どもを育てる社会の在り方～
堀内都喜子氏（フィンランド大使館
広報部 プロジェクトコーディネーター）

15：00　終了

目次

2日間の日程 …… 1
ご挨拶（日本子ども子育て支援センター連絡協議会会長）…… 4

＜第1日＞

基調提案　「さあ始めよう！　私たちにできることから」…… 6
行政説明　「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」…… 7
基調講演　「心育ての子育て」…… 8
パネルディスカッション
「つなぐ、伝える、切れ目ない子育て支援に向けて」…… 9
インターセッション
①「フィンランドの育児事情と保育施設の紹介」…… 11
②「子育てを楽しみ、子どものかわいさを知る人が増える社会になるために」… 12

＜第2日＞

早朝セミナー
①「子育て支援の専門職に必要とされる子どもの体の知識」…… 14
②「小さな離島でみんなが工夫を楽しむ子育て支援作り」…… 17
③「体験を通して成長する子どもと大人の関わり」…… 18

分科会①……

第1分科会　「日本型子育て支援の創造」…… １９

第2分科会　「メディア漬けで壊れる子どもたち」…… ２１

第3分科会　「親たちは子どもにどこまでかかわることができるのか？」…… ２３

第4分科会　事例研究　「はじめの一歩」…… ２４

分科会②……

第1分科会　「ネウボラ：日本の子育て支援への意義」…… ２６

第2分科会　「子どもへ 親へ どう向き合えばいいのか」…… ２７

第3分科会　「つながり・ぬくもり・やくわり」―子育て文化の継承―…… ２９

第4分科会　実践担当者交流「ステップアップ」…… ３０

ランチョンセミナー

①　「通信クリニック：効果的な広報・メール・便りの作り方」…… ３１

②　「時代の潮流、ITが変える新時代の子育て支援環境を考える」…… ３２

③　「市内連絡会による支援職者精神衛生の互助管理」…… ３３

記念講演

「フィンランド流しあわせな子育て」～子どもを育てる社会の在り方～…… ３４

開会式の様子

会長からのご挨拶
新澤　誠治　氏

開会宣言
小岱　紫明　氏

役員理事

来賓の皆様

開会式の様子

江東区長
山崎　孝明　氏

心のこもったご挨拶を頂ました！
ありがとうございました！

参議院議員
前少子化対策担当大臣
有村　治子　氏

基調提案　　演者：新澤　誠治　氏

（子育てセンター実践研究会代表）

演題「さぁ、始めよう！私たちにできることから」

Ⅰ　講演内容

平成27年度から子ども子育て支援システムが施行され、国として子育て支援に積極的に取り組むスタートの年として、「地域子育て支援元年」と考える。

平成6年のエンゼルプランに先立ち、保育園での子育て支援を期待され、育児相談、園庭開放、「ほっとする場所」作り、母親講座、サロン等や、母親主体にならなければというねらいを持ち、父親参加のプログラム作り「プレママ会」などの取り組みをしてきたが、まだまだ一部の実践。この機会に「広げよう、深めよう、伝えよう」として子育て支援の実践を積極的に推進し深めていきたい。

新しい子育て支援の形としてフィンランドの「ネウボラ」や「マイ保育園」など、時代の変化に対応し、活動してきている。これからの子育ての方向性を示すものとして重要な意味を持つ。

今、私たちに求められるもの。５つの提案から。

1.「時代に生きる保育園」の自覚
子育ての多様化で深刻さが増す中、地域に開かれた保育園、子どもへのやさしいまなざし、子どもたちをつつみこむ保育が大切。

2.「子どもの最善の利益とは何か」保育の絶えざる問い直しの必要
かつては地域はしっかりしていたが、現在は昨日していない。異年齢集団の形成、生活の基盤をうえつけていく。

3.地域の自然、風土、生活、文化、人に囲まれて成り立っている
地域全体と連携して、保育は成り立っていく。

4.「地域の子育ての拠点」として
1軒の家なんだという意識を持つ。だからこそ挨拶から始まる近隣関係、「私たちはパートナーですよ」と宣言していく。

5.「子どもは未来」と大きな声を出していく
地域の方たちに力を貸してもらう。意見を聞く、私たちの決意を促していくことが必要。

「さあ、始めよう！私たちにできることからやっていこう」という宣言をし、輪を広げ深めていこう。

行政説明　演者：大倉　徳久　氏

（厚生労働省　雇用均等・児童家庭局　総務課　少子化対策企画室　係長）

演題「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

Ⅰ　講演内容

■３歳未満児の７～８割が家庭で子育てされている。また、核家族化が進むとともに地域のつながりが希薄化してしまう中、子育ては孤立化し、不安感や負担感を抱えて子育てするケースが増えてきた。この状況を改善する策として地域子育て支援拠点施設の設置が進められた。
■毎年全国で２００～３００の施設が増加しており、地域の希薄化防止に役立っている。そのため、地域で子育てを支援する組織づくりは大切と認識している。
■平成２４年までは、子育て支援施設は３種類の類型の中で実施していたが、新制度では、機能変更を行い、一般型と連携型の２類型とした。また、出張広場や放課後支援などの取り組みをクローズアップしている。
■数年前に取り組みを発表した「子育てビジョン」で地域子育て支援を強化したが、今回の制度で、更に取り組みを強化した。

Ⅱ　子ども・子育て支援新制度の概要

■ 新制度の主なポイントは
①「施設型給付」と「地域型保育給付」の創設　　②認定こども園制度の改善
③地域の実情に応じた子ども・子育て支援策の充実　　④市町村が主体となる（財政支援の一本化）
⑤社会全体による費用負担（質・量の拡充のための財源確保）　⑥政府の推進体制整備　（内閣府に設置）
⑦　国だけでなく地域版子ども・子育て会議の設置

Ⅲ　地域子育て支援拠点事業の今後の課題

■利用者支援事業は、子育て支援センターでも実施できる事業として国では大いに期待している。
■子育て支援員を育て、活用することが人材不足を克服できると考える。そのための研修制度の整備が求められる。

基調講演

演者： 渡辺　久子　氏

（慶応義塾大学医学部　小児科精神保健班顧問）

演題 「心育ての子育て」

Ⅰ　講演内容

日本は「心育てる」ことが「あうん」の呼吸でできていた。子どもを育てるということは、内臓感覚的なもの。
子育てはその子が自分の子を育児するまでを見届ける。高学歴＝幸せではない。

■こんにちは赤ちゃん事業（世界）
毎週訪問して年間追い続ける
母親の直感的育児を支えられる人が良い
■子育ての基本
安心感、響き合い、心からの楽しさ喜び
■フライバーグ
子ども時代の一番深刻な心の病は愛着関係が持てないこと。
あるいは愛着の絆が壊されること

幼児期――――――思春期
０～３歳　　１０～１５歳
脳の急な発育　　キレやすさ

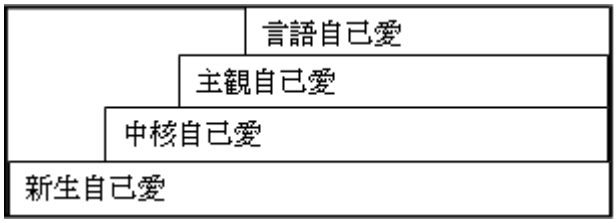
「心育ての子育て」
周産期からの親子の出会い
母子の愛着関係は胎内からはじまる
母親の直感的育児
乳児の間主観性

母子を包む周囲のかかわりの質が、今ここで母子の幸せにどう影響するか、多面的に考え、振り返りたい

Ⅱ　講演を通して明確になったことや課題

子どもにはいい大人のモデルが必要。子どもはいい大人になる権利がある。
自分が好きになること。人を信頼できるようになること。
こころ・脳は、関係・環境・体験に造られる
自分らしい自分探し：自己同一性

生涯続くこころの底の生きている実感。
４つの自己感（D.スターン）



Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

日本では子どもは大切にされていますか。
子どもは大切ですか。子どもが粗末にされる社会が日本？

■子どもの貧困
　教育格差。低い子ども予算。低い女性の地位。
■小児性愛者野放し
■少子化と家族機能不全
■父親不在は日本を沈没させる
オランダは6時に全員帰宅する。全員で食事の準備をし、片付ける。統計を取ると、１３歳の子どもは父に一番に相談する。子育ては家族関係が重要であるということ。ワークバランスを考える。
■子ども時代の一番深刻なこころの病は愛着関係がもてないこと。
毎日子どもの手を握っていますか？手のあたたかさで子どもがわかる。

パネルディスカッション

演者： 榊原　智子氏 *（読売新聞東京本社　調査研究部　主任研究員）*
前田　正子氏 *（甲南大学マネジメント創造学部　教授）*
横川　和子氏 *（子育てケアマネージャー　千葉県浦安市）*
柳溪　暁秀氏 *（中加積保育園　理事長・園長　富山県滑川市）*

演題 「つなぐ、伝える、切れ目ない子育て支援に向けて」

Ⅰ　講演内容

質問事項	榊原　智子氏	前田　正子氏	横川　和子氏	柳溪　暁秀氏
①自己紹介 ア、マイブーム　イ、最近のプチハッピー	ア、グリーンスムージー イ、ストレッチ	ア、ヨガ イ、ゼミの就職が決まったこと	ア、ばーば気分 イ、家の柿の木に実がついたこと	ア、スポーツ（バスケット） イ、飲み会
②子育ての現状に着いて （良いところ・課題と思うところ）	孤独と不安 子どもの免疫がない	支援の必要性への理解が深まる 不寛容な人が増える	支援サービスの充実	子育て文化の継承 人とのつながり
③現代の親について （良いところ・課題と思うところ）	親は必死にもがいている ネット依存	子どもは何よりも大切。 簡単な答えを求める	両極端な親	情報に振り回されている
④子どもの育ちの現状について （良いところ・課題と思うところ）	密室育児の副作用。地域と関わる経験が無くなってきている。	遊びの経験が少ない。子どもの経験量の格差。	子どもの育ちについての相談が多い	我慢をする体験が少ない。大人との関わりも少ない。
⑤妊娠出産に対する社会的な視線はどのようなものであるか	自己責任と思われている。子どもの少ない背景として、結婚したくてもできない人などが増えている。	大学生は男女にかかわらず子どもが好きだが子どもを産んだら大変だというイメージが強い	優しく見守る社会にしていく環境整備が必要	祝福であり、大変と考えている人が多い
⑥切れ目ない子育て支援では何を切れ目なくするのでしょうか？	日本の子育て支援は切れ目でしかない細切れの状態。人がつながっていくことが必要	親子ともに支えていくこと（医療機関とつなげていくこと） 就労し、安定した生活を送ること	すべての子育て家庭への支援に取り組むこと	人との繋がり（心身ともに健康であること）
⑦次世代までつながるために何をつないでいけばいいと思いますか	私たちが何をしていけばいいのかを考えていくこと	こどもや子育てに大切なものを伝えていく	行政の縦割りをなくし、共通の思いで取り組む	心を伝える（目に見えないもの、感謝する気持ちなど）
⑧何を伝えていくべきだと思われますか	業界、職種の縦割りの壁を越え、職種同士の学び合いをすることが必要	困ったときに助けてくれる人がいる、そんな場があるということを伝えていくとともに子育て文化も伝える	一人ではないことを知らせていく。あなたは一人ではないというメッセージを伝える。	日々の暮らしのたいせいつさ
⑨子どもの貧困や虐待に対して子育て支援の場で関わることの意味は	地域にある施設等で、SOSを発見する。専門機関へつなげていく支援を進める。予防的支援の充実	早期発見とた機関との連携。気になる子ほど、検診率は少ない。信頼関係を深め他機関へつなげていく。	親子の居場所つくり。親同士が助け合えるような場、子どもが楽しめるような場となるように	お互いのことを思いやる気持ち、相手に優しく関わろうとする気持ちが薄れている
⑩子育て支援センターは何を始めればよいのか（使命と役割） ⑪各支援センター・一人一人の支援者に期待することは	この場は、私の場所と思えるようなマイ支援者　マイ居場所になってくれる場。困難状況を発信し、施策につなげていく。	地域で子育て支援に理解をしてくれる応援団それぞれの仲間を増やし孤立感を無くする	親子の居場所つくり 親同士が助け合えるような場、子どもが楽しめるような場	かかりつけの小児科、産婦人科等と連携できるマイ保育園をつくっていく。プレパパ・ママにも足を運んでもらう。
⑫最後に一言	人口減の危機について考え始めている。子どもの減少に歯止めをするには、子育て支援だということを認識し、力量を高めていってほしい。子どもへ投資することについて声を上げていく。	親子の状況、社会状況は変わっていく。支援者と保護者との相性もある。一つのやり方に固執せずいろいろなやり方を取り入れる。保育全体のスキルを上げる。次世代の育成。	支援者一人一人が子どもたちに温かいまなざしを。 まずは、相手の思いに寄り添い支援をしていく。	子育てしやすい社会をつくる 地域も守るということを考えてみる

パネルディスカッションの様子

柳溪　暁秀　氏

前田　正子　氏

座長：村上　千幸　氏

横川　和子　氏

榊原　智子　氏

インターセッション① 演者：安藤　由紀子　氏

（建築家・一級建築士　東京都中央区）

演題 「フィンランドの育児事情と保育施設の紹介」

Ⅰ　講演内容

■自己紹介
　日本で設計の仕事をしてきたが、ステップアップの為フィンランドの事務所へ移る。生活しやすく８年間滞在。その間にドイツ人男性と結婚。出産し今３歳になる息子がいる。フィンランドでは働きやすく、子育てがしやすかった。子育て環境、育児事情など、建築士としての視点も持ち子どもの生活のしやすさを見てきた。

■フィンランドの紹介
（写真）ヘルシンキ：建物に高さ制限があり、こじんまりした心地のよいのんびりした町。人口６０万人。ちなみに東京は1,300万人。フィンランド全体でも540万人。人口密度でみると東京336人/ｋ㎡、ヘルシンキ15.7人/ｋ㎡。
（写真）駅・路面電車：町ではベビーカーを押していると乗り物は無料になる。大きいベビーカーを押して料金を支払うのは危険だから、という理由によるものだそうだ。小さい子どもの外出を認めている環境。
（写真）森と湖：仕事の後は自然の中へ。モッキという森小屋があり、ほとんどの家庭が所有している。春～秋にかけ、週末と長い休みにはここでゆっくり過ごす。休みは7月から一か月。学校も仕事も休みになる。ちなみにフィンランド人は8時間労働で残業なし。イクメンという言葉を作る必要もないほど、お父さんたちも自分の仕事として子育てに参加しているのが普通。
（写真）サウナ：モッキについている。サウナに入り、湖にそのままダイブする！男女は一緒。職場にもサウナはあり、男女裸で入るのがごく一般的。私も職場で入りました、とのこと。

■子育て支援
　ネウボラ：ネウボ（neuvo）＝アドバイス、ラ（la）＝場所→妊娠したら向かう場所。妊婦健診から就学検診まで一人の担当保健師がつく切れ目のない支援である。担当保健師さんはとても身近な存在で、知り合いのおばさんに会いに行く、といった感じ。出産前に選べる「育児パッケージ」か現金。ほぼ9割が育児パッケージをもらうようだが、出産後に必要なものがたくさん入っているし、箱はそのまま新生児のベッドにもなる。

■幼子との外出、外遊びを後押しする環境
（写真）児童公園の充実→反屋外空間。バギーがたくさん置いてあり、子どもはバギーの中で寝ている（－20度でも外で寝かせる）。バギーの中にはインターホンがあり泣くとわかるようになっているが、日本では考えられない！外のほうがよく寝るらしい。公園ではを借りることができる。常時、玩具の入った箱が設置されていて、使わなくなった玩具を入れていくので自然にリサイクルできている。また公園おばさんという人がいて、家事をする間（2時間くらい）遊ばせてくれる。

■パイヴァコティ＝保育施設
　フィンランドの一般的な保育施設。多くの子が日中、公立保育園に通う。私立の施設もある。午前・午後と1日2回、1回3時間くらい過ごす。
・パイヴァコティ（もっとも代表的な保育施設）・家庭委託保育・グループ家庭保育・家庭間保育・club
保育時間は5時間までのところ、5～7時間預かることろ、7時間以上預かるところ等さまざま
■ネウボラ制度：各自治体にあり無料。公立の病院にもある。30分から1時間の健康チェックのあと、親の話を聞く。育児パッケージはネウボラが広く使われるようになったきっかけにもなったシステム。妊娠6か月頃にKELA（フィンランド社会保険事務所）から支給される。

■公園ランチ：児童館に併設した児童公園で子どもたちにランチを無料支給。6～7月の平日。16歳までの子どもに支給。

■育児休暇：最高3年とれる。また同じ職場に戻る権利を保障している。育児休暇中も保育時間を短くするなどして通園する場合もある。

■待機児童なし：入園希望の4か月前に入園申請をする。子どもが保育を受ける権利を保障している。学校は7歳から。就学前の1年間は準備期間として教育を無料で受けることができる。

【保育施設】
他の公共施設と複合型の保育施設（写真）/図書館や小学校
●図書館と併設した園・3グループ60人の園児①6～7歳（就学前）②4，5歳③9か月～4歳
・園児は園庭から図書館を利用できる
・近隣の老人福祉施設へ週1度行く
・壁厚30センチ、二重窓構造なので音は漏れない
・一人になりたいこのためのスペースなどあり
●小学校と併設した園
・全体で150名、3グループ60名、大人9名
・移動可能な建物　・扉を開けると小学校につながり小学前児は小学生とランチをする
・体育館、音楽室、図書館、ランチルームの利用可能。その他空いた施設を自由に利用できる
・教職員の休憩室も共同
●移動可能な園（建物）
・工場で組み立て持ってくる（プレハブリケーション工法の利用）
・5年で移動させる（市からの案）。実際にはそれ以上使っている
・短期間で必要に応じた場所に作ることができる利点。直線、直角等、並べ方さまざま

インターセッション②

演者： 前田　正子　氏

（甲南大学マネジメント創造学部　教授）

演題 「子育てを楽しみ、子どものかわいさを知る人が増える社会になるために」

Ⅰ　講演内容

1．行政での経験から

・2003～2007年　横浜市の副市長を3年経験
・バブル崩壊で税収が減る。保育園をつくるには他の既存事業の廃止が必要になった。
老人の無料パスを収入に応じて有料にしたが、老人いじめとバッシングされた。何かをやめてさらに負担を増やさないと保育園はつくれないが、優先順位をつけにくい。
・議会、行政、市民の関係の変化　ハッピーな時代の終焉
・社会的に排除された人ーの増加。市民は社会を一緒につくるクルーになっていく必要がある。
　例：横浜市で緊急通報装置がついている一人暮らしの住宅で、気づかれずに死亡して1週間後に発見されたケース
　市民から抗議の電話、手紙など多数のクレームがあった。マスコミにもたたかれた。みのもんたの番組で公務員は何をやっているのか！とバッシングされた。360万人の市民を公務員3万人で見守るのは無理。市民に近所の見守りをお願いできないかと考えた。
　一人暮らしの高齢者をケアするには、生保担当者だけでなく、保健師のケアも必要。だが、病院に着替えを届けるなど専門職でなくてもできることを、支え合ってやっていく必要がある。人が人を支えていくしくみをつくることが大切になっている。
・本当に困っている人は役所に来られない。社会的、公的サービス供給の再構築が必要になってきた。

2．子ども子育て支援制度とは

・子ども関係の施策に恒常的な財源を確保する第一歩。今後、この制度をどう育てていくのかが重要。
・新制度は待機児童解消のためととられがちだが、人口減少地域の基盤の維持・確保にも大切な制度。
・地域の子ども子育て支援の充実が考えられている。
・就学前児童の居場所の調査では、0～2歳児の70%以上が在宅。この時期を支えることが大切であり、子育て支援の重要性がある。
・保育園をつくるより、子育て支援にお金を使った方がたくさんの親子を助けられるのではないか。しかし、成果を数値で表しにくい問題がある。
・予算は、福祉においても成果が数値化されるなど見えやすいところに配分される。子育て支援は成果を数
値で表しにくいが、在宅での子育て支援を充実させて健やかな親子を育てていくことが、将来的には行政の負担を少なくできる。

3．成果を数値化してアピールすることが大切

・財政局を説得する資料をつくった。育児不安が6割、虐待をしていると感じている母親が2割強。ここを放っておくと精神疾患になってしまう。その前に予防ケアが必要と訴えて予算がとれるようになった。困った親ほど行政につながらない。ニーズがつかめない。身近なところで相談支援ができるようにする。それが予防につながる。

4．市民の力を子育て支援に

・公立保育園併設型ではなく、独立型子育て支援センターを18か所つくった。
・当初、子育ての難しい問題をセンターでできるのかと言われたが、専門的な支援が必要なケースばかりで
はない。仲間の拠点がたくさんあって人と人がつながりやすくし、特別なケースだけ専門的につなげてい
く。地域で本当に子育てしやすい場所をつくるのは市民。
・子育てで思い通りにいかないこと、人の世話になったり助けてもらったりしながら、人は人とつながらないと生きていけないことを知る。また、自分がしてもらったことを返すこともできるようになる。
・民主主義、地域づくりの学校のようになる。一人一人が良い社会をつくる。みんなが幸せという社会づくりは、子育てのしやすい街づくりになる。
・地域子ども支援会議で、子育て支援の大切さをアピールしていくことが大切。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

保育園をつくるより、子育て支援にお金を使った方がたくさんの親子を助けられるのではないかと思われる。しかし、成果を数値で表しにくい問題がある。私達が行っている子育て支援活動がどのように子育て家庭を助け、子どもの健やかな成長のために立っているのかを数値化して、行政にアピールし予算を獲得できるようにいくことが重要である。

改めてなぜ子どもの声がうるさいという人が増えているのか？より良い社会を作るのは自分たちの力と責任が必要なのに、なぜ自分は関係ないと考える人たちが多くなったのか？1万年以上前の縄文の時代から、日本の精神風土は相互扶助、互助、互恵の中で助けあって生きてきたはずであった。それらが失われた時代にあって、ソーシャルキャピタルの崩壊と再生を願い社会の基礎を作るのは誰なのか、市民は考える時代に来ているのではないかと強くアピールをしていた。

今私たちは高度成長社会時代を経て、税収の増益を期待することができない現在、優先順位をつける時に、何を求められているのか、を考えなければいけない。人一の安心感を保障するためにも、社会的、公的なサービスの再構築が必要なのではないか、そして行政や子育て支援施設などの社会資源、利用者、市民などの協働が求められていると、話していた。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

行政だけでできることは限られている。専門家でなくてもできる支援はある。市民の力を子育て支援に活かすこと、人と人がつながりやすくし、地域で子育てをしやすい環境をつくっていくことが大切ではないか。

本当に子育てがしやすい社会をつくっていけるのは、市民。一人一人が参加して良い社会をつくっていけるようにしていくことで、子育てのしやすい街づくりができるのではないか。

しかし、今、子育てがしやすい街作りをするために必要なことは、日本型の子育て支援、特に「切れ目のない子育て支援」が今求められている。今存在する子育て支援は保育所、保育所併設型、広場型、NPO、児童館、地域子ども・子育て支援などの事業所がそれぞれのニーズにあった問題の解決に取りくまなければならない。

特に子育て支援の新しい社会的ニーズ、今、本当に求められている子育て支援に対して、保育ソーシャルワーク（保健・福祉・医療・教育・子育て支援・青少年育成）の展開が行政の意識改革と共にこの時代にある精神病理にも取り組んでいかなければならないと思った。

≪今、本当に求められている子育て支援のあり方≫

①小・中・高校生のための育児体験
　（子育て文化の創造）
②胎生期における子育て支援
　（ご夫婦の育児体験）
③新生児期における子育て支援
　（産後ケアのあり方）
④乳幼期における子育て支援
⑤幼児期における子育て支援
⑥学齢期における子育て支援
⑦青少年期における子育て支援

早朝セミナー①

演者： 井出　徹　氏

（井出デンタルクリニック　院長）

三原　留美　氏

（山東こども園　主任　熊本県）

演題 「支援の専門職に必要とされる子どもの体の知識」

Ⅰ　講演内容

「2歳の5割が便秘傾向！？
　子どもの便秘の原因調査と改善アプローチ」

三原留美氏

　H26年度子どもの生活・遊びに関するアンケート(千葉、埼玉、富山、福岡、熊本の14園対象)によると1週間のうち何日排便があったかの問いに対し、毎日排便があると答えた人が0,1歳児では7～8割、2歳児以上になると5割に満たないことが分かった。H25年度の調査結果と同様に2歳児を境に、毎日排便する割合が急激に減少しているという結果が出た。

　そこで普段一緒に暮らしている子ども達の現状を知るために、山東こども園の子どもたちを対象に便に関するアンケートを実施した。その結果、直近1週間、どの学年も4～5割程度しか毎日排便がないことが分かった。想像以上に排便に数が少ない結果だった。又排便の時間帯に関しては、朝が23%、夕方・夜が36%、決まっていない子どもが40%と、朝出る子どもは4分の1にも満たない結果となった。
毎日便が出ていないから便秘とはいえない。週のうち3～5日排便があり、子ども自身が不快でなければ問題ないとも言われている。しかし山東こども園では「朝から毎日出る子どもの身体に育てる」ということを、乳幼児期の大きな目標の1つに掲げた。毎朝便が出る→元気に遊べる→美味しく食事が摂れる→元気に遊べる→ぐっすり眠れる→朝、気持ちよく目覚める→朝ごはんをモリモリ食べる→便が出る……というサイクルは、子ども達の暮らしと育ちのために重要なことだと考える。

今年の6月に、山東こども園でも排便に対する取り組みをした。先ほどのアンケートの結果から、便秘だと思われる子どもを対象に10日間、生活を見直すチャレンジと排便日誌の記入を行ったところ、1番成果のあった子どもは、普段は週4日程いきんで便を出していたが、10日間のうち9日間いつもより楽に便を出すことができた。

【チャレンジの内容】
1．朝食を摂る30分前までに起床する。
2．夕食前のおやつを減らし、夕食の量を増やす。
3．食物繊維が多い食材を食べる。
　特別なことではなく、ちょっとした心がけだった。排便時に子どもたちによかったねと心から声をかけていくことで、排泄が喜びに変わっていく。保育園の保護者は忙しい方が多い。しかし朝から少しだけの余裕と、トイレに座る時間を作ることを心がけようと伝えて生きたい。
最後に保育の世界では「おしっこやうんちは子どもが自分自身で出来る初めての親へのプレゼントである」と言われている。この最高のプレゼントをしっかりと受け取り、子どもたちにありがとうと伝えていきたい。

「口腔育成～歯科の役割、保育の役割～」

井出　徹　氏

様ーな視点から現代の子どもたちの身体への研究や調査が行われている。本日は歯科的な立場から、子どもの発育を捉える。
過蓋咬合の状態の子どもが増えている。過蓋咬合とは咬んだ時に上の歯に隠れて下の歯が見えない状態。この咬合状況では、声が小さく、言葉が不明瞭な場合が多い。乳歯本来の咬合は乳歯の前歯の先同士が当たっている。声が大きく、滑舌が良い場合が多い。

保護者へのアンケートでは、3、4、5歳児別でも全体でも6割の子どもは食事に対する意欲は旺盛だと考えている。逆を言えば4割の子どもたちは食事に消極的ということになる。朝食の意欲ある群と関連がある項目は、環境（テレビなど）、雰囲気（家族そろっての食事、会話）、普段の口の状態（開口）などがあげられる。
また食事中に水分摂取すると答えた保護者が多い。水分を摂取するということは咀嚼がうまくできていないことに繋がる。咀嚼し唾液がしっかりと分泌されていれば食事中にお茶や水などで水分補給をする必要はない。現代は大学生でもいつでもペットボトルを持ち、食事の時に常飲する姿がみられる。
歯があれば噛める、ではなく唾液が分泌されることで食べ物が喉の奥に運ばれ食べることができる。
以前8歳と10歳の子どもがいる保護者が相談に来た。相談内容は「8歳の子どもが食事の際に音を立てて食べる」というものだった。音を立てて食べるのは歯がかみ合っていなく、頬や舌を使いなんとかして食べようとしている証。乳歯にプラスチック製の歯をつけかさ上げすることで改善された。

身体構造の成り立ちでは以下のように言われる。
・適切な刺激によって機能が向上し、その機能を繰り返し刺激することによって構造が確立する(原田碩三)
・口は育ちの履歴書である。育ち(暮らし方)は、体の構造に現れる(村上千幸)
あえて姿勢を猫背にし、肩を前に出す。この状態で字が書けるか？大人は手首をうまく回し書けるかもしれない。しかし子どもは難しい。その結果、HBの鉛筆が小学校などの教育現場で使われなくなっている現状があり、姿勢が悪く筆圧が薄くなっていることが原因と考えられている。また小学生の5割が正しく雑巾を絞れないという事実もある。生活の中で動きとして捉えてきた行動が、現代の便利な生活によって奪われている。家庭でテレビを見ている時、テレビの前に行ってチャンネルを回していた生活から、座っている状態のままリモコン１つでチャンネルが変えられてしまう。単純な動きが奪われ、微細運動がなくなっている。便利な社会の皺寄せが子どもたちに来ている。現代はどうしていくべきか、
考えていく必要がある。歩かないとセロトニンは出ず、脳は活性化されない。固くなっている身体を柔らかくするには鎖骨や足の付け根、顎を左右それぞれ30回にぎりこぶしでさすることで改善される。日中口が開いている子には上唇で下唇を巻き込む動きをしたり、温かい湯気を鼻から吸ったりすることが効果的とされている。
成長することには原則がある。方向性では中心から末端へ、上から下へ。動物は心臓(核)から作られ、生物は食・呼吸をする口から発育する。順序性では首座りからお座り、一人立ち、歩行という順序。口から咽頭、喉頭、食道と成長する。そしてそれぞれの部位と期間は相関関係にある。

　生活の変化により、子どもたちの外見の姿にも変化がみられている。1960年代と2010年代の子どもたちの写真を比べると顔の形が細くなってきていることが分かる。子どもは社会に適応することがわかっており、2010年代の子どもたちは現代の道具や玩具(ゲーム、携帯など)を使いこなす能力が適応しているため、タッピングが早いことや物の判別認知能力(薄いプラスチックの塊を見て、携帯であるという認識)が高いと言われている。社会が“子ども用”化を行った結果、ヴィゴツキー説によると発達の最近接領域(ちょっと頑張ればできるかもしれない範囲)における発達の機会がなくなっている。(例：子ども用ハサミによって、大人用の物へのあこがれや使いたい意欲が育たず、機能面も発達しない。)少しの負荷、ストレスを与えることが重要だと言える。
子どもたちの能力や行動、社会が子どもを見る目など子どもを取り巻く環境の変化は他にどのような影響を及ぼしているのか。以下のようになる。

①子どもの気になる状態
【下肢】
趾力や脚力、脚筋持久力が弱い、土踏まずの未形成、足の筋肉が少ない、外反母趾、O脚、X脚、足首の可動性が小さい、片足立ちや反復横とびの能力が低い等
【上肢】
視力や握力・腕力が弱い、肩甲骨が脇寄りで左右の位置が縦横とも大きい、手が不器用、肩が真上まで上がらない、転倒時に防御の手が出ない、指しゃぶり、爪かみ等
【頭部】噛む力が弱い、立体視能力が低い、瞬き反射が遅い、目の大きさや高さに左右差がある等
【動言】運動能力が低い、動きが固い、群れ遊びをしない、とっさの動きができない、暴力をふるう、多動、集中できない必要なことが正しく伝えられない、言葉が汚い等
【こころ】情緒が不安定、意欲や気力がない、同じ遊びを続けることができない、抑制力がない、感性や注意力、判断力が鈍い、忘れ物をする、予測能力がない等

②アレルギー児の増加
3歳までに何らかのアレルギー疾患にり患している子どもの割合は平成11年度36.8%、平成16年度36.7%、平成21年度38.8%と約4割で推移している。また食物アレルギーとアレルギー性鼻炎が増加傾向にあり、アトピー性皮膚炎は常に高いり患率で推移していることがわかる。

　上顎は鼻腔を形成する骨と同一の為、顎の成長が悪いと鼻腔の容積も狭くなる。耳鼻咽喉科では鼻腔が小さいとアレルギー疾患になりやすいと言われている。鼻呼吸はフィルターがあると考えられる、鼻呼吸ができず口呼吸をすることによりフィルターがない状態となり、乾燥しやすくウイルスに感染しやすいと言える。子どもたちの顔が細く変化していることはこのアレルギーと鼻腔の関係にも大きく影響していることがわかる。社会や環境への適応能力が優れている子どもたちであるが、これと同時に能力や構造が発育していない状況(様ーな能力低下、り患等)がある。
口腔(口・鼻・喉の構造)が発達するとは口腔内の容積や鼻腔が広くなること、咽頭部の機能が向上すること、咽頭部の舌骨が下がり、正しい位置にあることを言い、それによって食事や呼吸、言葉などの機能は発達する。そのため口腔は成長の基盤であり、身体の成長は顎の発育が1番最初と言われている。口腔の発育不足を補うには負荷を加えていくことが不可欠。負荷によりさらに成長発達が促進される。

　口腔の発達と身体の発達は相補的な関係性にあり、顎が歪むということは顔面や体も歪む。歯科の分野ではキッズベースという混合歯列期口構造育成装置硬質重合レジンを口の中に入れることで口腔内に負荷をかける治療行為により解決している。機械的に負荷を与えることによる口腔育成・発育課題の解決は実証されており、子どもが持っている発育する力を促進する。以前暮らしの中にあった噛みしめる、踏ん張ると言った顎への負荷により顎は成長する。また負荷がかかることによって出来たことが嬉しいという心の成長にもつながる。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

顎への刺激となる活動とそれに必要なことを以下にまとめる。
①夜中のくいしばりには探索や発見、新しい物との出会いによる新奇性、何かをしたいという意欲
②運動による踏ん張りや緊張には重い物や使いにくい物を操作する全身を使った瞬間的な力、群れで遊ぶ中で生まれる興奮
③食行為には固い物や大きい物などその子にとって食べにくい物を食べることにより臼歯部でしっかり噛み合わせて食べることや口腔内の刺激
食行為によって育成した症例では野菜を全く食べなかった3歳児が4カ月後には野菜を食べて先生や友達に褒められたことがきっかけで野菜を食べるようになり、4歳相応の心身へと一歩を踏み出した。

現代の子どもたちは姿勢の悪さを友だちに指摘される、14歳でまだ初潮が来ない、小学生になり言葉や行動などの課題が表面化、腰痛や頭痛など様ーな苦難を抱えている。乳幼児期は人間の基礎を作る時期。子どもは成長に必要な刺激を欲しがっている。学童期・思春期に課題を持ち越さないで良いように大人ができることは、刺激のある生活を準備することである。刺激とは負荷であり、負荷は成長につながるもの、「できた！！」という喜びに代わるものである。子どもたちにとって負荷のある生活は身体機能の向上だけでなく満足感を感じ心も育っていく。負荷が少なくなる要因は以下が挙げられる。
・便利グッズ(マグマグ・子ども用のおもちゃなど)
・子どもに対する手厚い対応(子ども優先・刻み食材・過保護など)
・快適な暮らし(エアコン・エレベーター・車など)
・遊び内容、範囲の行動制限(掴む・投げる・登る・喧嘩など)

【質疑応答】
・「3歳で歯が全て溶けてしまった子への原因と対応について」(島根県　保育士)
→虫歯だろう。人口甘味料を含むドリンクの常飲。
永久歯の根元はレントゲンで見えるはずです。しかし生活環境を見直さなければ永久歯が生えてきても同じことです。ネグレクトや貧困で歯医者に行けない子どもが増えています。そのような問題は口の中に出てきます。おかしいなと思ったら家庭環境に何かあると思って対応する視点を持つこと。

早朝セミナー②

演者： 山田　有美子　氏

（ハレルヤこども園　園長　鹿児島県与論島）

演題 「小さな離島でみんなが工夫を楽しむ子育て支援作り」

Ⅰ　講演内容

出身は横浜。学校卒業後、離島の保育園で働きたいと思い、ふらっと飛行機で島に来て早29年。都会生まれの都会育ちの氏が、島にあこがれて、当時、結婚して子どもを産み育てるなら島がいいと思い、そのまま結婚して現在に至る。昨年園長に就任。

　島は何でも近い。生活スペースが狭い。無いものがいっぱい。みんなの声が聞こえるからこそできる事。できないものがいっぱいだからこそ、声を出し合い。力を出し合っていく楽しみがある。島にいる人の中にはそれが嫌な人もいる。しかし最近はその状況をプラスに考えられる母たちが増えてきた。

幼保連携型認定こども園、子育て支援、放課後クラブ他たくさんの事業を行っている。保育士一人一人が〇〇してあげたいという気持ちになり、いろいろなお手伝いをしている。そしてそれがネットワークになり、島の拠点となっていった。様々な活動を行っている。資料参照。

子育てネットの中で親たちが中心となって、いろいろな活動をしている。子育てサークルとしての活動も園ではサポートしている。例えば、都会での子育てきつい人、与論島おいで！仕事は？住むところは？みんなで考えていく。このように支えあう体制が出来ている。子育て世代の方だけでなく、様々な人との関わりを大切にしている。島でも子どもをプログラミングしてしまい、一週間の習い事の予定が決まっている子もいる。スポーツ少年団も両親と楽しんで行うところまでは応援するけれど、それ以上は思うところあり。子どもに無理をさせると思春期に大きな問題となってくる。子どもたちには楽しみながら、いろいろな体験をしてほしい。与論島にも東京から来た人は核家族の場合もある。島もネット社会なので、いらない情報がたくさん入り不安になる。先々の教育に対する不安等。就学前までのお子さんは、さまざまな体験を通して学んでほしい。島では最近4人5人と子どもを産む人も増えてきた。しかし兄弟が多くても、現在は地域でも学校でも園でも、けんかをさせないようにしている大人の前ではおりこうさん。都会の子と同じようになっている。

思春期の子ども向けに、夜の児童館を実施している。いつも空いているわけではない。バンド活動や、夜の居場所として必要な時に開設している。親といるのが嫌な時期があっても繁華街とかは無いので、児童館が9時まで開放している。親御さんにも、子どもについてのアドバイスをしている。親育てにも使命がある。小さな島なので出会う人が限られている。いろいろな大人との出会いから人間形成されていく。保育士も一人の大人として寄り添い見守る。スペースのみならず、そこにどんな大人がいるのかどのような姿勢でいるのか人的環境としての機能もはたしている。失敗しても大丈夫。と教える、

島では18歳で島から離れる。（それ以上の学校がない）18歳までに親から離れるためには、それまでに社会で生活できるように育てなければならない。都会で自分を殺さなければならない、うまく立ち行かない大人になってしまう。地域の子育て支援は保育園を卒園してから18歳まで行かねばならない。子育てはこうすればいいんだ、楽しい、体験した人にしかわからない。人が育つということは楽しいものだ。

親子体験活動は、様々なアーチストが移り住んでいるので、容易にできる。社会教育活動は、教育委員会ではなくてこども園がやる。

休日の遊び場として公園がない。台風がよく来るので木陰がなく暑い。保護者からの要望で、アスレチックの材料を園の予算で購入し、職員と作った。子どもも親も喜んでいた。遊具の点検は自然な形で、体制ではなくマニュアルではなく気づいたひとから始まっていく。職員はきっかけ作り。

医療機関が少ないので、かえって過剰な薬の摂取がある。具体的な病気については嘱託医に相談して不安を取り除くような話、あるいは必要ならば沖縄まで検査に行くよう促す。（沖縄まで船で4時間。プロペラ機で40分。出産は島ではしない。産前産後1～2か月妊婦は留守になる。）

子育て支援をする時に大切なのは、問題が起きた時に、学校の先生、保健師

児童相談所等に通報する前に行った先でケアーをしてもらえるかどうか考えて、紹介していく。また紹介してもその関係は続けていく。保育事業は後か

らついてくるもの。子どもにとって必要な事をやっていく。

子育ては大変だけれど、みんなですると楽しかった！といいながら次の世代を作る事。これこそが真の子育て支援である。そのことに共感できた人が、次

の支援者として戻ってくる。（保育所は町立３．私立は１つ。）

小さな島なのでできる事なのかと考えている。保育士としても、この仕事が

生きがいとして続けていきたいです。

司会者よりインフォメーション

のあちゃんに心臓移植を！チラシ配布し協力願い。

このように口から口へと伝えていくのが本当のネットワーク！

早朝セミナー③

演者： 野村　直子　氏

（new education LitleTree代表 ・ 森のようちえん全国ネットワーク運営委員）

演題 「体験を通しての成長する子どもと大人の関わり」

Ⅰ　講演内容

「森のようちえん」とは
　森の自然体験活動を基軸にした子育て、保育、乳児、幼児期の総称。様ーな体験学習。
①まずやってみる
②自然を感じる
③自分で考える
④次の行動

「森」→森だけではなく、海や川、野山、星山、畑、公園など自然体験を通したフィールドを探す。

■自然の中で学習
・生死を知る
・子どもが自然と共に育ちあう

■タイトルごとの写真と例
「ドキドキ」「おいしい」「様ーな食の体験」「雨の日も」「母ちゃんだって」「時には涙も」「大人との関わり」

■大人との関わりは、、子どもの行動ありのままの姿を受け止め、肯定的

■しかし、身体と心の安全が保たれないときはNOを毅然とした態度で言っていくことが大切。

■子どもの自主性を尊重し、“見守る”ことが前提で、小さな失敗を含む経験が大切

■大人は子どもの“共感者”であること、子どもは安心感を得て、自分はできるんだという自身につながる

■仲間と助け合っていくことが、1歳児の年齢の頃から育まれている様子が見られる。
　→問題解決を自分たちでしている

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

未来につながる子どもたち
　頭で考えて「やっておいた方がいいからやる」のではなく、心の底から「これがやりたいんだ」と思うことができればどんなに大変でも、それを苦労だと思わず、楽しんできます。
結果ではなく、体験こそが大切。自然の中でたくさんの遊びを通し、「感じる」ことや「自分で考える」ことを身につけます。自然の中で子どもたちをのびのびと育てる幼児教育の提案。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

一人ひとりの子どもがどう感じ、どう考え、どういう人として生きていくのかを認識することが大切です。人が誰かの役に立ちたいと思って生まれているといわれています。そして生まれながらに持っている力があります。子どもたちは様ーな体験をとおしていろいろなことを感じ、考えながら、学び、自ら育つ力を持っています。
私たち大人は、その育つ力を信じ、引き出し、伸びる手助けをするためにいます。それが真の教育だと考えています。子育て中のお父さん、お母さんとの対話や、保育者への研修を通して、提案・提供していきます。

分科会①第1分科会

演者: 伊藤　由里　氏
（江東区立森下保育園園長）

演者: 金子　昇　氏
（浦安市子ども部部長）

演者: 川部　利香　氏
（さかえ・子どもセンター嘱託助産師
船橋中央病院附属看護専門学校　看護学科教員）

演者: 横川　和子　氏
（子育てケアマネージャー　千葉県浦安市）

演題「日本型子育て支援の創造
～子育て支援センターは地域の中継地点～」

Ⅰ　講演内容

1）江東区におけるマイ保育園事業
・事業内容：①園庭開放、②相談や援助、③ママ友づくり推進、④情報提供（ハンドブックを作成し、わかりやすくする）
・かかりつけ保育園：パスポート作成。マイ保育園登録している園にどこでも行け、身体測定、プールなどできる。
・利用者が減り、小松市、金沢市を視察し、プレママ登録を始める。離乳食試食、０歳児見学。
・各園魅力的なものをつくっていけるよう、子育て支援アドバイザー認定研修を開催。利用者が増えてきた中で親たちから知らなかったといわれ、広く知ってもらうために「フェスティバル」を開催。300組700名近位来場する。
・仕事を離れたところでも胸を痛める親子を見かけたらおせっかいおばさんとして声掛けしていきたい。

2）浦安市の少子化対策
・市の特徴。住宅はマンション75％のベッドタウン。転出入多い。核家族95％。出生率1.09。市民調査をし、もう一人産むのに何が障壁かと問うと、お金、時間が無くなりストレスという回答が多かった。そこでこどもプロジェクトを立ち上げ、出会い～結婚～子育てにわたる切れ目ない支援。フィンランド・ネウボラに学ぶ。
・子育てケアプラン作戦。第一回妊娠届、第二回出産前後、第三回1歳誕生日前後と3回作り直す。
・こんにちは赤ちゃんギフト。2回目ケアプラン作成の際、衣料品など子育てグッズを2万円相当プレゼンんと。ファーストアニバーサリーギフト→3回目ケアプラン作成の際、市内協賛店で利用できる金券。
・10年前から子育てケアマネージャー養成講座を行い、人材育成を行ってきた。現在活躍中。

3）助産師から見る子育て支援
・風の谷保育園では平成20年からパパと一緒の母親学級を開始。知識の提供、相談より、妊婦同士の力を引き出すこと、先輩ママパパからのアドバイスが重要と感じた。
・育児不安について→不安の軽減では根本的な解決できない。大事なことは、不安が増えても倒れない太い幹を作る事。妊婦は子どもが産まれた時からすべての時間と意識を注ぐ。それえを与え続けるには、父親、家族、地域の密接な支援が必要。父親の意識も再構築する支援を。母親が子供に注げる愛情は、心のコップからあふれた分と言われている。まずはコップを満たさないと、エネルギー不足になってしまう。
・助産師と保育士の協働→助産師は母親の表情、言動を見る。保育士は子どもの表情や様子をみる。その違いがいい。助産師は母子をこよなく愛しているということ。それぞれの専門性で支援。

4）浦安市ケアマネージャー
・浦安市独自の資格「子育て課程支援要請講座」3級。2級→「子育てケアマネージャー」試験あり。
・ケアプラン作成時、保健師と同席。保健師は妊娠の基本情報。ケアマネージャーは仕事を続けるか、里帰りするか、上の子をケアする人はいるのか、手助けに来てもらえる人はいるのかなどきき、作成する。2回目のケアプラン作成の際、ハイリスク妊婦は担当保健師につなげる。又、育児ギフトをプレゼント。年度毎色を変え、同じ学年だとわかるようにしている。3回目の時は、保育園情報や発達の相談が増え、必要な場合専門機関につなげる。バウチャー券をプレゼントする。この件は買い物や、家事代行、一時保育に使用できる。
・「ひとりじゃないよ」というメッセージのもと、一緒にどのサービスを使っていったらいいか、考えていくが、実行するのはママ自身。ママを育てていく。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

〇行政の制度として守られることがたくさんあっても、知らない人が多いので知ってもらうきっかけに工夫している。
〇情報を聞くよりも、目で見て体験できる連携で支援。またそれを母親だけではなく、父親は大事な支えであることに意識を持ってもらえるきっかけ、出会いの場を提供していく。
〇それぞれの専門性をつないで支援をしていけるようにしたい。今後は医療関係者と連携をとっていきたい。
〇結婚から支援し、定住（浦安市）を目指す。地域で出産をし、その時の助産師が生後1か月しか関われない関係をもっとつなげていけるようにし、行政サポート、子ども目線のサポート、母子のサポート、親サポートをしていけるようになったらいい。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

〇傾聴。お母さんたちに寄り添って支援する。情報ばかり先に伝えると、自力でママになる力を奪ってしまう。適切な道筋のサポートをする。
〇両親に自己肯定感を。その中で育った子が日本を支えていく。
〇その地域の病院に所属する助産師に協力が得られ、保育園と連携して支援していきたい。
〇地域の人達は、子育てを応援したい人がたくさんいる。その人達の活躍の場を作ってほしい。
〇親になった人が、子育てを通して人間的に成長するのを支援すること。

川部　利香　氏

横川　和子　氏

金子　昇　氏

伊藤　由里　氏

分科会①第2分科会

演者： 清川　輝基　氏

（NPO法人子どもとメディア代表理事）

演題「メディア漬けで壊れる子どもたち」

Ⅰ　講演内容

スマホ普及より前の時期、日本はすでに世界一メディアに触れている子どもが多い国だった。スマホ時代を迎えその割合はさらに増えている。世界中を見回しても、乳幼児期にこれほどメディアに触れされている国は例をみない。自然音、自然光でないもので育っている現状は人体実験以外の何ものでもない。

赤ちゃんは子宮の中で聞いた音に一生馴染んで育つ。つまりメディア漬けの妊婦さんのお子さんはすでに機械音の方が心地良く、肉声が騒音になる聴覚回路ができあがっていることになる。これは怖いこと。聴力だけではない。視神経系路は出産後発達し始めるが、新生児にとって25～30㌢の距離のものが一番見えやすい。つまり抱いた時や授乳する時の母親の顔の位置である。母親へ向ける親愛の眼差しは、時にスマホを片手に授乳することにより遮断される。人間一般への信頼の第一歩である授乳時のアイコンタクトを母親自ら阻止しているのである。とんでもないことである。

岩手県眼科医連盟の調査によると、ボールをバットで打つという動作で空振りをしていたのは、ゲーム・スマホに長時間触れている子だったという。平面画面を片目で凝視することになるゲームやスマホを、長時間使用することにより立体視ができなくなった結果と言える。パソコンやテレビも利き目で見ている。使わないものは発達が遅れるのは言わずもがな。左右の視力差が0.3以上開いている子どもが増えているが、空振りや階段の踏み外し、車との距離感とれずにぶつかる子など、生活の中で影響が出ている。小～高校生のうち８割がキャッチボールをして顔面にボールをぶつけた経験があるとのこと。50年前、高校生のうち視力が1.0以下の子は全体の２割だったのが、今では全体の85.87%が1.0以下。さらに0.3以下は74.2%である。

「子どもの劣化がとんでもなく進んでいる」メディアの影響は計り知れない。1970年、ほぼ全家庭にテレビが入り、1972年あたりから子どもの視力の悪化が始まった。今では幼児期にメガネをかけている子が多いが、その中の何割かは生涯のうちで視力を失うだろう。

LEDは確かに経済効率はよいだろう。しかしLEDは可視光線の中でも最もエネルギーが高く波長が短い。日食の時に直接太陽を見てはいけないと言われているのに、同じレベルの白色光を照明として生活に取り入れるのはどうなのか。これは水晶体を通り越して網膜まで至るので、中途失明の原因第１位である加齢黄斑変性症を起こしやすい。スマホ・タブレットにもLEDが使われている。中途失明のリスクを知った上でスマホを子どもに見せますか、と言いたい。視神経回路が出来上がる幼児期にスマホ・タブレットを見せることは虐待だ、と言う研究者も出てきているほど。

スマホの影響は視力にとどまらない。タッチパネルはふたつの指だけの操作であり、子どもの時期に長時間座ってタブレットを使用することはロコモティブシンドロームの原因となる。ロコモは運動器の障害であり、従来は加齢により生じるものと考えられてきたが、今は子どもにその症状が見られる。歩かない、同じところを見続ける、筋肉を使わないなどから生じる。子どもが遊びの中で培われるべき能力を学習してきていないのである。絞る、押す、引く、つまむなど人の基本的な動作ができない子がどんどん増えている。近い将来、襟のボタンを片手で止めるなんてできなくなるのではないか。

５歳児の1日の歩行数を比べてみる。
1970年代：15,000歩、1980年代：12,000歩、1990年代：8000歩、そして現代ではおよそ5,000歩でしかない。足は歩かなければ絶対発達しない。体幹の筋肉が育っていない子どもが多すぎる。サッカーの岡田監督もゲームの影響を嘆いている。日本体力学会も2003年に「今の子どもの足は70代の老人と同程度」と発表している。家庭で意識的に歩かせている親はいるのか。子どもの劣化を防ぐのは、もはや保育園の役割と言っても過言ではないだろう。

世界的に見ても日本は子どもの自己肯定感が際立って低い。15歳児への「私は孤独である」という質問では全体の1/3が、「私には居場所がない」の質問には1/5がYESと答えている。また2014年の子ども若者白書での29歳以下への「今の自分に満足しているか」の質問にはYESが45.8%、「自分の将来は明るい」の質問にはYESが61.6%となっており、24カ国中最下位である。他の国は８～９割でYESと答えている。

出生率も昭和23年頃のピーク時に比べると1/3に減少している。その上子どもの自殺率は世界一、小中学校の不登校は12万人‥。一人の子どもを育てることが今まで以上に重要になっているということ。もはや日本の子どもは絶滅危惧種。20年後、心が育って働ける子どもを育てるためには、何よりも親子共一脱・メディア！

2時間勉強してスマホ利用１時間未満→平均点75点／
2時間勉強してスマホ利用4時間→平均点57.7点
殆ど勉強せずスマホ利用１時間未満→平均点63.1点／
殆ど勉強せずスマホ利用4時間未満→平均点47.8点

という結果がある。学んでもスマホで脳が機能しなくなることが証明されている。子どもの権利条約では「子どもの発達権を保障しよう」「子どもの学習権を保障しよう」こんなことでは発達権も学習権も保障できない。

一部の企業の利益のために振り回されている人間が多すぎる。子どもの目・足の育つ機会を奪っているのはメディアであることをしっかり認識しよう。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

■日本は世界一メディアに触れている子どもが多い国
■ゲームやスマホは平面画面を片目で凝視することになり、立体視ができなくなる原因につながる
■子どもの劣化がとんでもなく進んでいる
■幼児期にメガネをかけている子が多いが、その中の何割かは生涯のうちで視力を失うだろう
■子どもの時期に長時間座ってタブレットを使用することはロコモティブシンドロームの原因となる
■子どもの劣化を防ぐのは、もはや保育園の役割である

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

■切れ目のない支援をするために、子どもたちの育ちをしっかり守る必要がある。
　その為には脱・メディア！
■子どもの発達権を保障しよう
■子どもの学習権を保障しよう

分科会①第3分科会

演者: 品田 知美 氏

（城西国際大学福祉総合学部 准教授）

演題

「親たちは子供にどこまで関わることができるのか」

Ⅰ 講演内容

１）子育てはなぜ大変か

①幼いころはしたいほうだい？
日本：幼いころと高齢の時に自由度が高い → 日本で厳しく育てるのは学校か。
米国：成長して壮年期にかけて自由度が高い
②厳格な西洋式VS寛容な日本式育児
日本：「泣く子と地頭には勝てない」。性善説。
→「自然に」子どもは育っていくものと考え、子どもの欲求を受け入れる。
洋式：子どもには生まれつき邪心が備わっていると考える伝統。性悪説。
→親が主導権をとり、子どもの欲求をコントロールする。

③「抱き癖」は消えていった
「母子健康手帳副絵本」の変化
60年代：「抱くことは、お母さんとの愛情の結びつきに大切ですが、可愛いからち３～４ヶ月以上の赤ちゃんをやたらに抱いて、抱き癖をつけると、これからの育児にお母さんが苦労します。
00年代：「抱くことで泣くのが少しでもおさまるのであれば、抱いてあげましょう。抱くことができるのも今のうち。気にしないで思う存分抱いてあげてください。」

④変わる親の悩みどころ
1歳を健やかに迎える育児から、よりよく子どもを育てる育児へ。母親は高学歴化しても仕事をやめ育児に専念する傾向に変化なし。

２）子育ての現状と地域・親たちのネットワーク
・親たちの生活は仕事や家事で忙しい
・子どもの半数は母のみと同室で就寝
・3歳児神話は変化しつつも根強い
・子育て補助は都心から離れている家庭ほど、親以外の支援が少なくなっている

３）子どものいる家族の食生活
・日本女性は、子どもの世話よりもご飯作りにかけるじかんの法が長い
・子どもと共食しない親は多く、働いていない親の84%共食しないことがある。
・年代で見ると、1988年～だんだんと「共食する家族」は減ってきている。

Ⅱ 講演をとおして明確になったことや課題

子ども同士だけでうまく遊べなくなっている。
つまづいたり、失敗しながら子どもたちは成長していく。
子どもたちの姿、発見を大切に
たわいもないことを大切に！それが子どもの価値！
子ども観、子ども像が与えられている
子どもの姿をよく見つめ、子どもの言葉をよく受け止める。子どもが子どもを育てる。
思春期は親が育っていかないと、子どもが育たない。
いろいろな視点、観点から親は子をみていかないとだめ

Ⅲ 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

子どもたちにとって、たくさんの親が必要だ。
子ども同士の総合教育、わが子を育てる、子どもたちが育てあう子育て、親が子どもに育てられる。

子育て支援の課題
・近代教育制度、どう継承していくのか。多くの大人が関わって子育てしましょう。
・生活の中で育つ、子どもの遊び、遊びにとどまらず、人間の本質、人間の新事実
・あるがままに認める、憧れ、あてにする。

分科会①第4分科会

演者：　中沢　真知子　氏

（すみよし愛児園）

演題「研究事例　はじめの一歩」

Ⅰ　講演内容

1）すみよし愛児園
子育て支援センターの立ち上げた時の話し、テーマ「七転び八起」
→南海失敗しても起き上がるという意味から立ち上げ時の失敗を含めて
支援センター職員、保育園職員それぞれの気持ち。
・センター職員・・・「支援センター配置」出産復帰後の配置に、職員の輪からはずれてしまう嫌な気持ちがあった。何をして良いかわからず、クラスに入ることで気を紛らす。
・保育園・・・「いつま私も」保育士でなくなるのかも。子どもへの活動から親子の活動になることで母親の前でできるか不安。
・センター職員・・・「センターの役割」年間利用者数の目標を保育園側から言われ、人数を考えてしまう。その後気持ちを切り換え、目に見えるものではなく見えないものを大切にしようと思いなおす。センターをしってもらうために、地域の中に入り、公園に出向く。
・保育園・・・「一緒に遊ぶの？」親子に園庭を開放することで、園児が自分のお母さんを思い出すのではと心配。実際、園児と一緒に遊ぶ母親の姿を見たことで母親と担任の会話がうまれ、心の距離感が縮まった。
・センター・・・「大切な場所」相手の立場に立つ気持ちが芽生える。園児とセンターで活動を共にし、気付き合いをするようになった。居場所作りは自分で作る。
・保育園・・・「もっと知りたいな~」センターは何をやっているのか、園とセンターで情報交換をする。保育園併設の良さを実感。大切な場所は自分の喜びになる。

2）さかえこどもセンター　「子育て支援センター（拠点）の必要性と意義」
少子化対策で始めた支援センターだが、現在出生率はあがらない。初産平均年齢30.6歳。
①現代家庭の状況：核家族化、人間関係希薄化、第二子里帰り出産はしない。情報偏り、ネット依存、スマホいじりが課題
②育児ストレスの要因
③子育て支援センターは
④支援センターの役割
⑤保育園が子育て支援をしている意味
⑥担当者が心がけること

以上の講義を踏まえ、グループ討議。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

・自分の気持ち次第で人と関わりながら居場所作りはできる
・目標を持つことで何をするのかが明確になる
・こうなりたい、こうしたい→人のつながり協力の輪が広がる
・地域の人と関わることで、地域の人が利用者親子を気にかけてくれるようになった。→子育ての大切な時期を共有している思い。
・失敗を恐れない。
・文章、記録を残す。→可視化
・助産師など専門職との連携
・担当者が感じる、見極めるなど心の力を身につける
・支援センターと保育園、一緒になりやる事を増やす。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

1.共感できること　（ポスティング）
・支援センターが生きがいになっている。→課題：文章、記録の可視化、保護者へ。
・支援センターに来られない人→広報を見る、見ない、どんな方法があるか。
・記録をどう残すか→センターの仕事がスムーズになる。心のゆとりと視点が必要

2.孤立化
・マンション住まい家庭。出産のリスク、気になる子に対し、スペース作り。助産師等と連携。

3.センター同士のつながり
・地域の支援センターが個々に支援している状況。
・地域の中で、情報共有することで広い目線で支援できたら良い。
・同じ立場の人が話し課題を出し合い、アドバイスしあう→委員会を作り、行政も巻き込んで。

4.はじめの一歩
・保育者がセンター担当者。人へのアプローチをするときの、戸惑いがあった。（今までは信頼関係ができてからなのにという思い。）
・同じ敷地内に支援センター設置。保育園・センターそれぞれの職員がどう親に声をかけるか難しさがあった。→信頼関係を前提に話すことで前へ進む。

5.担当の心がけ
・母親自身を知るために距離を置く、前に出る、感じる、見極める心の力を身につける。段階を踏み、距離を縮める。信頼作り。
・ひとりが好きな親→ひとりが好きだが話したい→待つことの大切さ。声高、トーン。しゃべりすぎない。
・ポイントを置く。自分を見つめなおす。
・同一園舎の良さ。子どもの姿が見える場面がたくさんある良さを生かす。
・伝え方（お昼寝中の利用について、どうしたらよいか、お互い譲りあっている。お互いさまという気持ち）職員全体で環境を考える必要がある。
・一緒にやることを増や実体験→お互い良かったと思える。

分科会②第1分科会

演者： 高橋　睦子　氏

（吉備国際大学大学院社会福祉学研究科長）

演題 「ネウボラ：日本の子育て支援への意義」

Ⅰ　講演内容

1）社会背景・歴史

・フィンランド→人口すくない、EUに入り、難民問題抱えている。豊かな自然、のびのび、フィンランド語独特。市町村自治体「kunta（クンタ）」北欧の福祉国家の行政主体。

・60年代後半～70年代あたまにかけ、仕事をしながらの子育ての難しさにより、出生率がガクッと下がった。

・母子保健の歴史：医師や看護師が地域での活動を初める。すべての母親たちは直接アドバイスを受ける機会。すべての母親への直接の助言と個別の必要に応じた支援。ユルッポ教授の処方箋→無料相談。1970年代からの精神障害者グループホーム。1980年代からの就学全教育。20世紀ネウボラの普及。21世紀、現在のような「対話・信頼関係」を重視したものに。子育て家族に優しい快適なデザイン。

2）出産・子どもネウボラ

・出産前からずっと同じ保健師が子育て家族の成長を支援する。切れない支援とはりようしゃからの制度デザイン。最初の面談に50～60分かけて、子育てを手助けしてくれる人々、家族を把握していく。

・出産直後が一番手厚い。生後2～4週間までに一度訪問し、母親を安心してもらう。ネウボラオフィスだけでなく、自宅に伺うことで家族支援がクリアになる。

・健康診断のほかに「総合検診」（家族全体・父、兄弟も）。「発達保障」赤ちゃんと近親者との関係性の健全な発達、母子愛着、安定的な発達。親子関係、カップル家族関係、生活の安定と安全のために3回行う。

3）ネウボラオフィス（保健所）

・特別な物はないが、大事なことは「ネウボラおばさん」ゆったりと子連れに優しい空間。保健師さんと実習生がいる。たくさんのシミュレーションの経験を積んでいく。いろいろな人が来て当然。

・ネウボラおばさん→こわがられていない。同じ目線でいるけれど、専門的な知識も持っている。子育て家族はほぼ100%が出産後子どもネウボラにつながっている。

4）どうして赤ちゃんに優しい社会になったのか

・男女の社会的平等と男女共に仕事のキャリアと家庭生活を重視してきた。

・乳幼児への手厚いケアを社会上げて支援することは節税のために一番生産的な方法という意識→健やかな乳幼児ほど心疾患や精神疾患のリスクが低く、健やかな大人に成長する可能性が高い。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

〇「ネウボラ」は一方通行ではないという姿勢であること。→身近な行政であり、市町村が主体となっている。フィンランドは税金は高いガ、子育てに関する制度で還元を実感しやすい。支援者は主に保健師。

〇ネウボラ→妊娠期から10回は会う。母子が周りとつながるきっかけを確保。情報保障。出産、子どもネウボラ、家族ネウボラ、個別に支援し、上手くつながるよう工夫している。切れ目ない支援は「対話」から。子育てはノンストップである。対話の積み重ねをして、信頼関係を築く。

〇ネウボラを通じて、DVや虐待の早期発見、予防、早期支援をする。→一回では話してくれない。積み重ね、他のパパママとつなげていく支援をする。

〇フィンランドでは出産して2日目には退院する。→出産プラス子どもネウボラの存在は安心感がある。一人で抱え込まないことが定着している。出生届は生まれた機関が登録する。

〇子ども手帳、母子手帳がある。→母親のコンディションが大事。子どもをみなければという不安から母親をハッピーに。母親手当で「育児パッケージ」ねらいは、動機付けだった。ネウボラに母親を誘うための民間アイデア。→検診につながってほし。「共感と平等のシンボル」である。所得制限なく、多胎分娩への配慮もある。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

〇モノローグな支援とは→専門職、その他の支援者側が設定した枠組みでのやりとりや情報提供。（脚本の本読み）。ダイアローグな支援→本人を中心に話し合い、面談に参加するひとが皆発言し、何らかの反応、レスポンスを得る。（無視されない、支援者側の価値観や判断を押し付けない）

〇財政面→目が回るほどの高税でも、文句が無い。ネウボラがあってあたりまえの制度である。厚生労働省は、ネウボラを最低限保障している（発言力がある。研究のデータがある）。厳し人材問題もあるという現実も。近年フィンランドへの視察が多く大変。ダイアローグして視察に行ってほしい。

分科会②第2分科会

演者： 清川　輝基　氏

（NPO法人子どもとメディア代表理事）

演題 「子どもへ親へ　どう向き合えばいいのか」
～ワークショップ・実践編～

Ⅰ　講演内容

６～７名のグループに分け話し合う機会を持ち、テーマに沿って策を話し合うことにする。その前にまずメディアついてどう考えているか、拠点ではどのように伝えているか発表してもらう

《山口県・Aさん》

園の方針は脱メディアだが、実際、見せてはいけないはわかっていてもついつい見せているようだ（スマホよりテレビ）。お母さんたちの大変さもわかるのでどこまで言ってよいのか正直悩んでいる。

《小平市・看護師》

園長が脱メディアについて保護者には言っている。だがタブレット、PCなどで繰り返し同じ動画を見せている現状。アンパンマンから海外のアクション映画まで見せている。

《埼玉県・ふじみ野市》

拠点内で携帯の使用は禁止しているが、親のメディア漬けは明らか。インターネット上で子どもの障がいのチェックをするなど、情報に振り回されている感じがする。子どもとの時間を楽しんだり、目の前の子どもの現状を直視して時分なりの判断をすることも危うくなっているのではないかと感じる。

《熊本県》

田舎なので、かえって都会よりテレビなどのメディアに触れている時間多いのではないかと思う。車の中でもずっと見せている。移動はすべて車で、歩くことがない。家でもテレビ、ゲーム多い。外で遊ぶことも少ないと思う。田舎の方が劣化が心配。

☆（先生より）園医はメディアについて何か言っているか。保護者に対して発信してくれているのか。
（参加者より）１歳までの集まりの中で、産婦人科の先生にお話をしていただいたことがある。園長からも話している。～他には医師が関わっているという声は聞こえなかった

☆（先生より）それでは誰が保護者に話すのか
　　→保育園、支援センターの役割大きい

☆グループ討議：「脱メディアにかんしてやっていること」

《Aグループ》

・スマホやアプリを使って子どもをコントロールしようとしている（鬼のメールなど）が、支援センターで細かいことを言うと利用されなくなるので、手遊びなどをたくさんして親子のコミュニケーションをとれるように関わろうとしている。
・センター内はスマホ利用は禁止しているが、写真を撮りたい要望があるのでそれは認めている。
・園はIT化が進み、動画やペーパーレス、提出書類にもスマホにて返信してもらっている。園のIT化が進む中、センター利用者には反対のことを言いにくい気がする（写真もネット上にて注文できるようなシステムも取り入れていたり…）

《Bグループ》

・保護者に声をかけ続ける
・その場で理解してもらっても根本的にはどうなのだろう？
・２歳まではメディアをやめようという配布物をする
・絶対に見せないという親から皆に話してもらう（親同士の方が入るかも）
・携帯にかわるもの：メディアに頼らずできるものの提案が必要（遊びなど）だが、指導する側がしっかり理解できていない
・普通に使っている（この普通を変えるのが難しい）

《Cグループ》

・保育園内の支援センター：特に対策をとっていない
・保護者への啓発は特にしていない。中学校では試験中は使用禁止などの原則があるようだ。保育園だけでなく、切れ目ない啓発が必要
・ポスターで啓発
・保育園ではTVを見せない
・保育現場では「スマホ見せない・見ない・使わせない」ミニ劇で知らせた

《Dグループ》

・年度始めに保護者アンケートをとり（TVの時間など）把握する
・保護者会で園長先生が話をする：10歳までは触れさせないという内容
・保護者への話は一方的な気がする。保育士の前だけでは意味がない。TVなど時間を決めるなど必要
・支援センターの中で、TVをつけると座って食べる・車の中でも映像を見せていると安全などの声が聞こえる。悪いことはわかっているので、相談されるとどう答えたら良いのか悩む
・核家族：家事の忙しさを考えるとどうしたらよいのか。スマホがないと生活はできない。問題解決はできていないが少しづつ改善できればよいのではないか
・何もしないより言い続けて少しでもメディアから離れられたらよい。時間を短くできたときに親を褒める

《Eグループ》

・だめだとわかっていてもスマホ見せてしまう
・大変さを共感しつつも「それでは違う関わりってどんなことがある？」と問いかけると、考えてくれる
・１時間見せている親に、親同士で「私は30分だよ」と伝えると、減らそうとしてくれる
・熊本県八代市の取り組み：小中学校は毎月10、11日をノーメディアデーにしている。意識が違ってくる。
・お母さんたちも人任せ。子どもも親の言うことより、他人の言うことの方が聞く

☆グループ討議をふまえ先生から
自分の楽のために子どもが失明する危険性を親は知っているのか。経済的責任をとれない年齢（中学生まで）はスマホ持たせないという認識が必要。部活やPTAの連絡をラインでするのはとんでもない！皆で寄ってたかって業者を儲けさせ、子どもをダメにしている！
　「かしこい使い方教室」などあるが、これはむしろマイナスでしかない。相当本腰を入れて親に向き合い、子どもに向き合わなければいけない。家族内でルールを作り約束する。使う場所、時間など。「これは君の将来を守るための提案」だときちんと説明し合意のうえで約束する。命令ではないという理解をさせる。また約束を破ったときの罰則も決めておくこと必要。今、中学・高校で入学時に約束ごととして皆に周知：夜9時以降の使用を禁止等。これは子ども自身も楽にさせているという。地域・学校のルールとして決めてほしい。
　私たちは専門家として毅然とした態度で保護者に向き合うべき。近年、タブレットを使った教育が失敗だったことがわかってきて、パソコンを導入した国ほど成績が下がっている。世界ではデジタル・デトックスという考え方が広まってきている。潮目が変わり始めているとは感じているが、日本は全く遅れている。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

■世界ではデジタル・デトックスという考え方が広まってきている。潮目が変わり始めているとは感じているが、日本は全く遅れている

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

■スマホを持たせるとしたら家族内でルールを作り約束する。使う場所、時間など。「これは君の将来を守るための提案」だときちんと説明し合意のうえで約束する。命令ではないという理解をさせる。また約束を破ったときの罰則も決めておくこと必要
■今、中学・高校で入学時に約束ごととして皆に周知：夜9時以降の使用を禁止等。これは子ども自身も楽にさせているという。地域・学校のルールとして決めてほしい
■私たちは専門家として毅然とした態度で保護者に向き合うべき

分科会②第3分科会

演者：増山　均　　氏

（早稲田大学文学学術院　教授）

演題 「つながり・ぬくもり・やくわり」

Ⅰ　講演内容

１）地域の空洞化、無縁化に立ち向かう
　子どもの安全な生活を守りきれない「地域の空洞化」
地域に住む人ーのお「つながり」をつむぎ、「ぬくもり」を大切に。地域社会が持つ子育て力を維持し、高めていくことが大切。子育てに向けての地域の力が衰弱していることが問題。

子どもー若者ー大人ー高齢者をつないだ人と人との新しいネットワーク作りが不可欠なこと。すなわち「つながり・ぬくもり・やくわり」の創造にこそ地位気力復活にカギがある。

30年間、子育ての地域力創造の努力よりも、地域の放棄の勢いのほうが急速だった。地域の子育て力が衰弱したとはいえ、地縁や血縁に支えられた伝統的な地域のつながりは残っており、地域の文化や芸能の担い手・継承者が老いつつあるとはいえ、存在していた。

２）「地域の子育て力」の創造

３）「地域」は学びと気づきの宝庫・文化伝承の拠点

４）「地域づくりと子育て文化の継承」お考える基本視点
人口が集中している都市部では、地域づくりと子育てネットワークの構築が模索されていますが、深刻な高齢化に直面している過疎の村ー、農村部では地域社会そのものの基盤が失われている。地域の自然や環境に上手に手入れをし続け、暮らしと文化を守る人ーの共同と連携を大切にすることこそが、地域を空洞化・無縁化させないポイント。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

１）子育て支援とは
子どもには本来、自ら遊んだり、学んだりする力が備わっている。それを周囲の大人たちが阻害しないようにすることが大切。子育てに悩んでいる親は多いので、支援者はその悩みを受け止め、次世代に親たちの負の遺産が受け継がれないようにしてあげることが子育て支援である。そのために親のできることとできないことを見極め、できないことは周囲が代わって行うことが支援。さらに声に出さない、見えない悩める親子を周囲から探していくことが大切。

２）支援の輪を広げていく
家庭のよいところなど、あらゆることは、子どもよりも親に伝えるようにする。「大丈夫ですよ」「いい子ですよ」と聞くと親はやっと安心することができる。結果的に子どもは落ち着く。まじめな親にまじめな話はしないようにする。本当に必要な人に必要なことが伝わるように話をする大切さがある。例えば、０，１歳で保育園に預けている親と3歳まで家で見ている親に対する支援は全く異なる。育児がよりよく行えるように配慮していく。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

　子どもの貧困率は先進国の中でも高止まりし、じわじわと上昇している。一人親の貧困率は相変わらず世界最悪の水準。日ーの生活に追われ、家族の目が行き届かない子どもたちも増えている一方で、目だけでなく手をかけすぎてしまい、子どもたちの生活力を奪ってしまっている親も多いのが実情。親たちの生活状況にますますの格差が広がっている中で、子育て支援にマニュアルはない。
支援する立場にいる側は、時に想像ができない親子の暮らしがあるという現実を前に、常にイメージを広げてく努力をする必要がある。子育ての支援をしようとする側と、受ける必要があるとされる側の人ーには世代による差、自分の育った家族や地域の常識いとの違いなどさまざまなギャップがある。さらにグローバル化の進展で支援される側にはさまざまな国籍の人が増えており、そういった人たちには子育て支援の情報が届かず、視野に入ってこない場合もある。当事者の親たちからは不安のこえも　支援要請がなくても、子供を支援していかなければならない。事例は相当量増えている。支援側が積極的に探していく必要がある。
外国人の対応に関しては、各地域の実際の取り組みが紹介された。通訳ボランティアを紹介し、入園、通院、その他必要なときに、利用できるようにしたり、互いの文化を学び合える場をつくり、交流を深めて地域全体で関わっていったりしているとのこと
　その際は支援者のみだけでなく、一般の人にも広げていけるように努める必要がある。

分科会②第4分科会

演者：　山本　沙織　氏
（和泉愛児園）

演者：　菅野　由美子　氏
（さかえこどもセンター）

演者：　中山　勲　氏
（福）童心会）

演題「実践担当者交流　ステップアップ」

Ⅰ　講演内容

事例①「親同士で育む一歩全身の心」
・母親は知識を沢山もっている。保育士には実際経験させてもらえる事を求めている。
・親子リフレッシュサロン→悩みや不安を相談できる場。親子でいきいき・のびのび過ごせる場。出前保育、乗馬体験。
・お母さんの自立を目的としたサークル。
・活動の内容はその年の母親のカラーをみて決める。母の得意な事を生かして、講師になってもらうこともある。母が主体となる事で、自分たちで準備をすすめてくれたり、活発に活動してくれる。
・お母さん先生～共有できる自分の時間～・・・母の気持ちがよくわかるので、参加する母たちも安心できる。気持ちに寄り添った声かけ。
・支援センターへの信頼感・感謝の気持ちから、センターの掃除をしたいとの申し出があり、皆に広がっていった。
・受け身から自分たちで行動を起こしてくれる方が増えた。
・課題：父の参加ができるような企画を考えていきたい。
事例②「子どもを預かる～みんなで子育て」
・保護者が少しだけ子どもから離れる「アンティーマミー」（ボランティアのマミーさんが子供をみてくれる）。ボランティアさん、子どもから元気をもらえる。母、マミーがあったから子育てを頑張れた。
・子育てが不安と訴えるお母さんに、子育ての楽しさ、仲間と支え合う安心感を感じてほしい→子どもをみんなでみあう「あずかりっこ」。お互いさまの子育ての仲間づくり。
・お母さんが離れる時にしっかり挨拶してもらう（ごまかさない）。泣いてしまう子の気持ちにマミーさんが寄り添って、信頼感が産まれる。
・課題：あずかりっこで人の子まで見れないという親が出てきた。
・成果：自分の子どもと違う新鮮さ、子どもってかわいい～の再確認。親になった人が子育てを通して成長してほしい。
事例③「園児と共に」
・群れをつくることをしなくなった。新しく保育園が変わらなければならない。虐待、DV、孤立化などの世代間連鎖の中で何が生まれるのか→チーム保育の中で予防保育（支援センター）が必要となる。
・育児の苦労をねぎらう言葉をかける→母に自信を持ってもらう。
・園全体の職員で声をかけ、心配りをする→孤独な母親が心を開いてくる。
・名刺、地域の民生委員さんが孤立している家庭の母に配っている。
・ありのままの自分を受け入れてくれる保育園→安心できる場所。
・人と人とのｂぬくもりの中で子どもが育つ町、柏。
・メンタルヘルスケアを保育園がうる時代になっている。（群れの中で育つ）

＜グループ討議より＞
・お母さん先生に結び付ける手立ては？　→利用時に書いてもらうアンケートに趣味を書いてもらう。
自分から名乗り出てくれることも→自分の趣味を活かしたいという気持ちが誰にでもある？
・「あずかりっこ」をするにあたり、責任もあることだし入りたくないという方もいるのでは？
　→他の子を預かるのがこわい、ハードルが高い。まずは子どもをあずけてみて！とハードルを下げてみる。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

・地域の力、親の力をかりた支援のかたちがある。
・やれないと思うと、何もやれない！できることから初めてみる。その経験知を広げていく。何ならできるか、何から始められるか。
・「親の力を活かす」「園児と共に」「子どもを預かる」・・・基本の３つ。
支援センターは、相談が一番の基本
ふらっと来られる環境づくり
来ている方ニーズを知ることが大切
園と併設されているメリット→色々な力がそこにあることを活用する
・できないとあきらめないで、何ができるのかどこと連携してできるのかを考える。
・子育てが楽しいと思える瞬間がある場であってほしい。

ランチョンセミナー①

演者： 市川　玲子　氏

（健康とよい友達社）

演題 「通信クリニック：効果的な広報・メール・便りの使い方」

Ⅰ　講演内容

■講師の製作物（書籍、パンフレット等）の紹介
ー作業をしていく中で学ぶことがたくさんある
ーできる限り手を抜かず、伝えたいことが伝わるようレイアウトを工夫していく

■広報・便りは見た目が大事！
ー情報とは…見た人が知識を得て、判断して行動を起こすもの
ー見た目＝読みやすさ
ー文章についての注意点
・短く端的に
・できるだけ行間にスペースを空ける
・単語の切れ目で改行する
・最後の一行が一文字にならないよう工夫する
ーレイアウトに関する注意点
・イラストを入れすぎるとごちゃごちゃする

■タイトルまわり
ータイトルが一番目立つように配置する
ー発行者は小さくても読めればよい
ー発行者とリード文は別のものなので、同じ囲みに入れない
ーリード文は改段落の際も字下げをしない

■リード文
ー長すぎると読めない（読む気がしない）
ー短くまとめて、空いたスペースにイラストを入れるのもよい
ー長くなってしまった時は、横二段にして区切ると読みやすくなる

■カレンダー
ー見やすくする工夫をする
・色をつける（濃い色にしたときは文字を白抜きにするとよい）
・網かけをする
ー上下に日付の入らない場所ができたときは、そこに情報を入れてもよい
・注意事項
・イラスト
ーレイアウトで迷った時はプリントアウトしてみる
ー一度ひな形を作っておけばずっと使える

■囲み
ー囲みどうしがつながって見にくくなっている
⇒４つある囲みのうち、一番上と三番目だけにしてその他の囲みを取るとすっきりする
ータッチをつけると見やすくなる
・見出しは大きく太くゴシック体、本文は小さめにしてフォントも明朝体に変えると読みやすい
・行頭文字を使う
※は補足事項に使うので、●、■、★、♪など
・下線、囲み文字、網かけを多用すると見にくいレイアウトになる
＊どれが大切な事項なのかわからなくなる

■メール
ー勝手な解釈で読まれるものと理解しておくことが大切
・大切なことは電話とメール両方で伝える
・丁寧な表現を心がける
×～してください
○～していただけないでしょうか
○恐縮ですが…
勝手なことを申し上げますが…
ー段落と段落の間は一行空け、字下げはしない
ー日時や場所などは箇条書きにする
ー件名の入力を工夫する
・後から検索しやすいよう、内容がわかりやすい件名にする
・返信の際はＲｅ：をつける。ただし、Ｒｅ：Ｒｅ：…と続くときは、１つに減らす
ー相手の文面の一部（必要な部分だけ）を引用して返信する
ー相手が読んですぐわかるように表現を工夫し、興味を持ってもらえるようにする

★空いた時間にフォーマットを２～３種類作っておけば、　加筆修正するだけで済む
⇒自分の労力を減らすことができる

ランチョンセミナー②

演者： 倉持　孝士　氏

（株式会社ビズウィンド）

演題 「時代の潮流
ITが変える新時代の子育て支援環境を考える」

Ⅰ　講演内容

◎本業ときっかけ
　システム開発の仕事。自分のITシステムの力を使いなにができるかと思ったこと。
◎子育てする側の子育ての話
・ネット社会とシステム化の現状
【Ⅰ】インターネットの利用状況→いろいろな人に身近に使われている
・利用率　１３－４９才→9割
　　６０才以上は下落
・所得が低いと、利用が下がる
　情報化　格差社会
・アクセス数（ネット）
８６％→２日に１回アクセスしている
・都道府県別関係なし
　おおむね７－８割の利用率
・通信端末
　９４％スマホ多
　PCも増
・ユビキタス社会と言われている
　つまり、どこに行ってもネットにつながる社会
・子育て世帯の利用状況
育児情報
　ママ友から聞く４４％
　ウェブサイトから　５５％
　→鮮度高いので利用も高い
・子育てサイトを大きく分けると
　①育児相談　②育児情報　③意見交換
・専業主婦は育児・家事の合間をぬってネットを利用している。
・母親がネットに求めていること
　①専門家より現役のままの声　②自分の書き込みに応えてくれることで悩みの解決
　③他人の声から育児の参考に
・科¥母親の育児ストレスの３つの因子
　①第１因子：育児不安　②第２因子：子どもにハつ当たり（いかり）
③第３因子：自自分が我慢している、育児負担感
　⇒インターネットで育児ストエスが解消
　＊現代はオンラインコミュニティーが地域コミュニティーの補完、代替の機能を果たしている

・道具サポート：託児・保育
・情報サポート：相談・助言・共感

・インターネットは生活に欠かせないもの

【Ⅱ】情報サイトの事例
Ex1　ウィメンズパーク（ベネッセ）
　・3人に1人が利用している
　　（20代～30代の既婚女性のうち）
　年間70万人の女性が新規入会
Ex2　タマヒヨネット
　・出産～妊娠
Ex3　行政のサイト
　・子育てページが明確に、誰でも探しやすいサイト
　ネットによる親の相談が10件／日。しかも深刻な問題多い。
　→顔が見えないゆえ、よいこと
　→きっかけにして、他の機関とつながる

　・子育て環境におけるIOCのあり方を提言
　→情報の一元化により
　→行政を中心に育児及び育児家庭環境に関する情報を共有し、子育て環境について孤立させない。地域での子育て環境を整える。

【Ⅲ】保育支援に関するIT化
　Ex1　ママれんメール（ビズウィンド）
　　保育園休みの連絡・遅刻の連絡など

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

・育児情報はママ友から４４％ありながら、他はウェブサイトから取得している現代は、育児ストレスや相談もネットに頼ることが多い。株式会社の人気サイトのみならず、今は行政を中心に子育て情報を整理し、子育て情報の一元化をし、発信、子育て支援の一端を担っている。
子育て環境を整え、孤立させない地域での子育て環境づくり、ウェブサイトをきっかけとしてのサービスにつなげるように育児サイトの充実が求められている。

ランチョンセミナー③

演者： 大崎　幸恵　氏

（NPO法人子育てネットくまがや代表理事）

演題 「市内連絡会による支援職者精神衛生の互助管理」

Ⅰ　講演内容

大崎氏　自己紹介‥資料参考

子育てをしている時に知り合いがいなかった。一人きりの子育てがスタート。同じアパートに住む同じ年頃の子と仲良しになるが引越しで離ればなれに。やがて仕事復帰したが、娘が小児がんに。４歳の誕生日を病院で迎える。３年間の病棟生活だったが、７歳４ヶ月で亡くなった。その後３人目の男の子を授かり、この子を育てるにあたり何か子育て支援に関わることできないかと考えたことが今のきっかけになった。

■子育て支援：子育ての悩みを解決してくれるのは仲間だが、ご近所付き合いがなかなかない
仲間作りのできる場の提供
すべての子育て家族を支える

■くまっしぇ：熊谷市地域子育て支援拠点連絡会の「くま」と「しえ（ん）」から名付けた。
各拠点で親子の情報共有をし、どこの拠点へ行っても安心できるネットワークを確立
先月も拠点で知り合ったお母さんに宗教がらみの布教活動を拠点外でしているお母さんへの対応の意識を統一したりと「くまっしぇ」で共通の倫理観を持って支援している。
年１回の「くまSUNフェスタ」は今年で７回目。熊谷市福祉部子ども課と二人三脚でやってきた。市長の「子育てするなら熊谷市」のスローガンとともに行政の中でも認められてきた。
Tシャツの背中に刻んだメッセージ「ここがあるよ、ここにいるよ」

■精神衛生　：くまっしぇのスタッフは保育園併設の支援拠点の保育士、所長、園長もいる。それぞれがそれぞれの場所でお母さんたちに行っているサポートが、そのままくまっしぇスタッフに対するサポートとして機能している。同じ園の保育士には理解できないことも、くましぇスタッフはわかってくれるという根本的な安心感で繋がっている。良いことは共有しあい、真似してもされても文句は生まれない。利用人数が評価に直結していない現状があるからか。シラける人は一人としていない、水をさす人もいない幸運。でもこれは幸運なのか。私たちが作ってきた空気なのではないか、との自負も、ある。

■行政との足並み：立ち上げ時より、子ども課と足並みを揃えてやってきた。くまっしぇにも市の広場が入っているが、行政主導ではないやり方がよかったのではないかと感じている。拠点側も行政に寄りかからず、自分たちがなんとかしなければといおう意識を持ち続けている。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

子育てしているママサークルから始まったNPOや保育園併設の支援拠点が集まって成り立っている連絡会。市内全19箇所がもれなく参加していることも重要。イベントを機に集まった。チャンスをものにしていくこと。お互いを尊敬し、尊重しあう気持ちがベースにあるので、お互いの良いところに着目できる。ここで集まることが精神衛生上、自浄・互浄作用がある。

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

子育てする親子のすぐ近くにいる支援者として、くまっしぇが中心となり他機関団体との包括的なネットワークを作り、出産前後から切れ目のない子育て支援のできる熊谷市を目指していく。

記念講演

演者: 堀内　都喜子　氏

（フィンランド大使館広報部プロジェクトコーディネーター）

演題 「フィンランド流幸せな子育て
～子どもを育てる社会の在り方～」

Ⅰ　講演内容

堀内氏がフィンランドという国に出会うきっかけは、中国への留学先でフィンランド人と巡り合い、彼らの誘いから2,000年から5年間　留学する。そこで、ゆとりがあり時の流れがスローながら、発展を遂げる国という実感を持つ。

　540万人の人口。オーロラ・サウナ・白夜・湖・森の国である。　現在不況であり、その中でTAXをあげても保障をしてほしいと願う国民性がある。
　教育費は博士課程まで授業料は無料である。また、フィンランド人であればその間　生活費・住居費の手当てもある
様々な団体が統計をとった情報によると、お母さんに優しい国、男女の格差、人材育成調査、女性が住みやすい、子どもの貧困率（少）など、世界的に見ても上位を独占している。一方日本は100位を下る分野もあるのが現状である。

前記の要因にあげられるのは　　①企業・・共働きが当たり前（クォーター制導入無）・育児休業の充実　②歴史的背景・・世界で初めて男女共に選挙権・被選挙権が与えられた。行政での女性活躍（政治家）（法律家）・・制度作りへの影響　などである。さらに、度重なる戦争で男性が出てしまったことにより、女性が働く状況が深まっていくなかで、変化を遂げていった。
具体的には、職場復帰まで育休が3年間保証されており、親休暇は8割が収得している。残業をしない。在宅勤務を選択する人が約28%いる。
中小企業が多い中、組合の力が強く前記の状況を後押ししている状況である。そして、その中で子どもにとって保育所は、誰もが入ることができる主体的な権利をあたえられている。
保育所保育・・家庭的保育・グループ保育　その他、民間保育、開放型保育、公園おばさんなど様々な保育形態がる。　行政は申し込んで2W以内に保育を提供しなくてはいけない義務がある。0歳で預ける割合は、0.8%である。
　更に特色として、6歳で就学前教育が行われる。内容は、遊びながら自分を律する自己肯定意識の向上を目指すものである。生涯を通して、すべての人に平等で均一の教育機会を保障しており、学びのチャンス・選択肢が豊富に保障されている。
子どもは、0歳児から真冬でも外で過ごすことで、体の健康や心のリフレッシュをしながら成長していく。

　妊娠すると、ネウボラへ行く。そこから一貫して同じ保健士が担当し、精神的にも家族全体の健康を支えていく。産後、高額の育児グッズの支給があり（現金もしくは物どちらか選択制）、定期検診が毎月あるなど（1歳まで）見守られていく。また、様々なネウボラがあり（出産ネウボラ・子どもネウボラ・青少年ネウボラ）、ケースによって専門家に繋げていき、社会全体で子育てを行う組織が確立している。　　一人一人が大切である。その一人一人が能力を高め、力を発揮して心身健康で過ごすことは国の責任である　　子どもは未来の納税者である。

Ⅱ　講演をとおして明確になったことや課題

〇制度・・税金の使い方（税率を上げる発想の前に、予算の組み方検討）、行政側の子どもへのまなざし、待機児童への根本的な解決は何か？　出産・育児に対する不安を多方面から支えることができているであろうか？
〇人・・本当の人間の価値はどこにあるのか？生き方・輝き方・平和とったカテゴリを企業・福祉・医療・教育・科学・行政等　垣根を越え真剣に話し合える、大人たちの存在はあるか？利益主義、結果主義が失っている物は計り知れない。　前記の思想は、教育の在り方捉え方も変えていってしまっている。　　また、子どもの価値や子どもについ教育の現場で多くの子どもが学んできているであろうか？（カリキュラム）
〇地域・・親子の姿に自然と声をかける人たちの存在、長い間できていた繋がりの途切れ、コミュニティーとなる場所の消失。おせっかいな人の減少。（人間関係の希薄さ）。群れる機会の減少。子どもに触れる機会の減少。　　不審者の対応と、なぜ前記と呼ばれる人が増えてきているのか社会の中で考えられているか。（対策のみにとらわれていないか）幼少期の関わりについての社会的責任・行政の責任・家庭支援はあったであろうか・・。
〇事業内容・・長期的なスパンで捉えたものがどれだけあるか？目先の喜び、サービスにとらわれていなか

Ⅲ　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

講師からの提言として・・会えない家族と会えるきっかけづくりの大切さ。　ネウボラの存在が子どもの死亡率を減少させた。
子どもは未来の納税者
〇フィンランドでは、出産後のプレゼントが育児グッズであったが、文化に合ったやり方の検討は未知である。物にとらわれず、きっかけ作りを幅広く視野を広げて考えていく必要があるのではないか。
〇不安な・孤独な出産・子育てをなくすため、地域に住んでいる様々な年齢の人とともに力を合わせ、村中で子育てができるよう、支援センターがすべての人のコミュニティーセンターになって知的・物的財産を提供していくのはどうか。又、古き良き時代の街づくりの仕掛け作りを意図的に行う場所となる。　その中で、EX　育児書にはのっていないような、おばあちゃんの体験知恵袋（風邪をひいたらおすすめの食材、ネギや大根など）情報の提供などスロー子育てのススメなど行われるのはどうか？
〇企業側の人と深め合う機会、伝えあい・学び合いをしてみたい。具体的な現状を双方が理解し合いながら、本当に必要な、子育て中の家族への支援を考えていける一つになると素晴らしいと考えた。（セミナーに企業側の人たちが参加し学び合える時が少しでもあり、より幅広い私たちの学びにしていきたい）
〇支援センター職員のさらなる専門性向上のための働きながら学べる機会を、職場の状況に関わらず（既に、キャリアパス制度がありますが）多く、学び直しができるようにしていく。

課題で記したように、様々な分野の専門家たちが独立して行う支援ではなく、共有しながら発揮できる支援が実現できるとより、深
かまっていくのではないであろうか？

閉会式の様子

中川　浩一　氏

木本　宗雄　氏

宣言文：川島　快友　氏

第７回千葉大会の実行委員の紹介

全国支援者大交流会

【会食の風景】

地域別にテーブルに座るが、途中からは席を移動しながら、様々な方と交流を楽しんでいた。

全国支援者大交流会

【十人十色ゲーム】

受付時に配られた10色の色紙をもとにグループを組む。各グループは話し合い、その色に基づく出し物を行う。
例えば、オレンジチームは腕を伸ばして、花びらを作り、体を寄せうことで、ひまわりを表現した。
他にも歌を歌ったり、ダンスをしたり、まさに十人十色の出し物をして、会場を湧かせた。